

基礎編

● 沖縄の公共建築物

沖縄県の公共建築物景観の現況を把握するために、平成7年度から平成8年度にかけて沖縄本島を北・中・南部地区及び宮古、八重山地区に分け、評価基準として施設特性とデザイン特性を設定して調査を行った。この現況調査から、立地する周辺地域の景観に良い影響を与えているもの及び景観上工夫を要するものがそれぞれ抽出できた。

公共建築物の景観形成および環境との調和を図るためには、現況を十分把握し認識しておくことが一つの出発点になると考えられる。

現況調査から得られたものを施設特性及びデザイン特性ごとに整理するとともに沖縄の公共建築物の歴史についてふれることによって景観形成を考えていくうえでの基礎とすることとする。

【1】施設特性(基本事項)

公共建築物の施設特性としては、まず敷地規模によって、周辺の町並みの形成に効果的な影響を与える工夫のあり方が異なる。また、そのボリューム(床面積)に応じて、周辺地区に与える威圧感を軽減したり、周辺になじむように形態や配置に工夫をする必要がある。建築物の高さによっては、周辺に違和感を与えないように立地環境に応じて形態や屋根などの工夫が求められる。

① 敷地規模

敷地状況に応じて工夫が見られる施設は、周辺のまちなみ形成や環境形成に効果的な影響を与えている。一方、工夫を要する施設の場合は、施設の機能的な面に重点が置かれ、施設の立地する地区との関わり方に問題があった。

敷地規模の大小が直接的に景観の善し悪しに影響を与えるわけではなく、周辺地区にゆとりを与える工夫や開放的な印象を与えることが大事である。



(那覇地方裁判所、那覇市)

② 床面積

良い影響を与えている施設は、規模の与える影響を考慮した構成(形態、配置、高さ、造成等)を行っていて、周辺地区へ空間的な広がりやまちなみ形成に寄与していた。

一方、工夫を要する施設の場合は、建築デザインに重きが置かれたり、施設機能の一義的な充足に重きが置かれていて、周辺地区のまちなみ形成や環境整備的な視点に欠けていた。

周辺地区に建築物のボリュームがどのような影響を与えるかを考えた設計が必要である。



(読谷村伝統工芸センター、読谷村)

※公共建築物の敷地、建物のボリューム等は設計の前提条件として示されることが多いが、地域の景観を読み取り生かす配慮や工夫によって望ましい景観の形成が図られるものと考えられる。

③ 建築物の高さ

工夫を要する施設は、市街地周辺部の集落、田園的風景地に建つ高層施設が多く、周辺地区の低層施設のまちなみと際立った違いをみせていて、まちなみの調和を乱している例が多かった。

中層施設の場合は、地域によっては周辺の乱雑な屋根並みの中にあって、埋没したり助長したりする例があった。

一方、良い影響を与えている施設は、印象的な形態や屋根の工夫によって建築物の高さの影響を緩和する配慮をしていた。



(那覇市宮辻団地、那覇市)

[2] デザイン特性(個別事項)

公共建築物のデザインの捉え方は様々であるが、今回の現況調査においては、輪郭、屋根、壁、色彩(素材)、建築物と緑の5項目を景観評価項目として取り上げた。

これらの項目は、周辺地域との関係で良好な景観形成に寄与しているかどうかを見るためのものであり、純粋な建築物のデザイン評価項目とは視点が異なるものである。

それぞれの項目ごとに評価の高かった施設を検証してみると、まず輪郭については地形との調和や背景への視界の確保、屋根については背景や周辺屋根並みとの連続性の配慮等がなされていた。壁については変化のある表情づくりや周辺環境との一体化の配慮、色彩(素材)についてはやわらかい色彩や素材の採用、緑との関係では敷地際の開放や緑陰の提供を行っている施設が評価が高かった。

① 輪 郭

評価の高い施設は、地形とのバランスや後背地の山並み、海岸線への視線の確保に対して、施設の形態、敷地利用、植栽等の工夫がみられる。市街地にあっては、隣接周辺地区のまちなみに、空間構成、施設の形態、植栽等が良い影響を与えていた。

評価の低い施設は、山並みや海への視線等に対する配慮が足りず、施設のあり方に工夫が必要となっていた。



(平良市中央公民館、平良市)

② 屋 根

評価の高い施設は、周辺地域の屋根並みとの連続性の配慮が見られ、また周辺への威圧感の軽減のため勾配屋根、分棟、分節化を行っていた。評価の低い施設は、山並みや地形との離反、周辺まちなみの乱雑さの助長等の例が見られた。

屋根は、建築物の表情や形態を規定する重要な要素であり、周辺まちなみとの調和の点で慎重な検討が必要である。



(名桜大学、名護市)

③ 壁

評価の高い施設の傾向は、曲面、雁行、分節に加え陰影のある表情作りと周辺環境になじむ施設づくりを試みていた。評価の低い施設としては、汚れが目立つ壁面や閉鎖的な表情の壁面の例が多かった。

壁には開口部、庇やベランダ等の突起物があり、また色や素材の使い方とあわせて様々な表情を工夫できる。



(那覇市総合福祉センター、那覇市)

④ 色彩 (素材)

評価の高い施設は、タイル、石張りに加え、コンクリート打放しの素材利用の壁面と、屋根の赤瓦使用や銅板葺の構成が多かった。

使われている色相としては、白色系統から中間色の使用例が多いが、壁面の汚れ等があると評価は低くなっていた。

また、素材の使い方に工夫をすることで評価が高くなる例もあった。



(那覇警察署、那覇市)

⑤ 建築物と緑

評価の高い施設は、施設周辺へ緑地、緑陰を効果的に提供していて、敷地利用、空間的広がり、敷地際の開放等、アメニティー形成に良い影響を与えていた。評価の低い施設では、緑量の不足に加え、周辺地域の硬くて乱雑な景観形成に拍車をかけていた。

緑は、建築物にやわらかい印象を与え、周辺環境との調和の点でも有効な手法となると考えられる。



(名護市役所、名護市)

[3] 歴史

本県における建築物は、古くはグスク正殿建築、地方の蔵元、士族の屋敷、社寺建築等を中心に長い歴史があるが、民家建築の歴史を含めて考えても、昔から公共的な建築物の影響は大きなものがあったと考えられる。

公共建築物の景観を考える前に明治以降の公共建築物の歴史についての整理を行った。

① 戦前の公共建築

明治時代以降は、琉球王朝の崩壊により、王府関連の施設は老朽化が進んだものの、首里城正殿等の修理、社寺や石門の国宝指定による保全などが行われていた。戦前の公共建築物のうち、代表的なものの一つに旧沖縄県庁がある。当時としては洋風でモダンな木造建築物で、県民に親しまれていた。

この時代は民家をはじめとして建築物はほとんどが木造であり、その施設規模からしてもまちなみは生活に密着した景観を形成していたものと考えられる。

また、戦前の公共建築物の中で特徴的なものとしては、沖縄のコンクリート建築の草分けとなった大宜味村役場旧庁舎および金武小学校がある。大宜味村役場旧庁舎は、当時の沖縄では極めて希な鉄筋コンクリート造、耐風構造の八角形のモダンな建物として戦後の新庁舎完成まで使用されてきた。

また、金武小学校は国頭郡役所・建築技手の設計によるもので、沖縄で初めてのコンクリート校舎として完成、1982年までの57年間当時の金武村のシンボルとして親しまれてきた。

これらコンクリート建築の設計者は、沖縄の気候・風土を考え木造建築では十分に補えない耐火、耐風、耐雨、防蟻の観点からコンクリート造の必要性を唱え実証していった。



(戦前の県庁舎、那覇市)
1920年(大正9年)～1945年(昭和20年)
(資料提供：県立博物館)



(大宜味村役場旧庁舎、大宜味村) 1925年(大正14年)



(旧金武小学校、金武町)
1925年(大正14年)～1982年(昭和57年)
(資料提供：金武町教育委員会)

② 戦後の公共建築

戦後は、沖縄戦によって多くの貴重な文化財、公共建築物、土木構造物が焼失したため急速な復興整備を進める必要があった。コンセット建築、木造規格住宅が応急的に推進されるなか、1940年代後期には大型台風により甚大な被害を被り、その後の建築物の構造を考える契機となった。そして、1950年代以降は、米軍住宅等の影響を受けて公共建築物はもちろん民間建築物までコンクリートブロック造、RC造に移行していった。

また、1950年代には建築基準法や建築士法の公布により、建築関係法令の基礎が築きあげられた。

1952年(昭和27年)琉球政府発足の年には、沖縄で初めての一般設計競技(沖縄立法院庁舎)が実施され、その後多くの公共建築物が設計競技により設計されている。

1964年(昭和39年)東京オリンピック開催の年と前後して、県内でも生コンの普及が始まり、公営住宅等の建設が急ピッチで進められた。

また、1960年代には、建築の非木造化が進み建設戸数で非木造が木造を追い越していった。特に公共建築物は本格的にCB造、RC造の段階を迎え、学校建築のすべてがRC造に切り替えられていった。

このころから公共建築物の数も飛躍的に増え、地域の代表的建築物として景観への影響も次第に大きくなっていった。



(旧沖縄県庁第1庁舎、那覇市)
1953年(昭和28年)～1986年(昭和61年)
(資料提供：県立公文書館)



(琉球大学志喜屋記念図書館、那覇市)
1955年(昭和30年)～1988年(昭和63年)
(資料提供：琉球大学附属図書館)



(那覇市久茂地公民館、那覇市) 1966年(昭和41年)



(那覇市民会館、那覇市) 1970年(昭和45年)

③ 復帰後の公共建築

1972年(昭和47年)の本土復帰に伴い、沖縄振興開発計画に基づき公共事業による公共建築物整備が進み、さらに1973年(昭和48年)の若夏国体、1975年(昭和50年)の沖縄国際海洋博覧会の開催により、民間建築物を含めて関連する公共建設ラッシュが加速された。

そのような中、建築物の建築スタイルとしては、1970年代中期頃までは米軍建築物の影響を受けて、現代建築(モダン)様式の平滑な壁面、フラットルーフ(陸屋根)が主流であった。

1970年代後期から1980年代後期にかけては、ポストモダン様式といわれる伝統様式を加味したスタイルへと移行していった。この頃からさまざまな形態の屋根(勾配、ポールト、アーチ等)が目につくようになってきた。

また、1980年代後期には、1987年(昭和62年)の海邦国体に向けて各地で体育施設の整備が進められ、地域の公共建築物の充実が図られた。

1990年代に入ると、地域性を加味したポストモダン様式の展開の試みがみられる。顕著な例として、建物の分節化、雁行、分棟、傾斜屋根等の多彩なデザインにこの手法の展開がみられる。



(県立博物館、那覇市) 1973年(昭和48年)



(国営沖縄記念公園沖縄館、本部町)
1975年(昭和50年)～1998年(平成10年)
(資料提供：国営沖縄記念公園事務所)



(浦添市美術館、浦添市) 1989年(平成元年)



(佐敷町シュガーホール、佐敷町) 1994年(平成6年)